

《動向・紹介》

## ドイツ系プロテスタント教会による日本伝道と関西

### ——普及福音新教伝道会の宣教師エミール・シラーを中心に——

林 祐一郎

研究対象との出会い——これは、自宅での読書や大学での授業を通じてのみ実現するものではない。筆者はドイツ史を専門としてきたが、6年前から大阪日独協会という民間の交流団体にも参加し、在日ドイツ人や在大阪総領事館関係者と度々接触してきた。本稿で扱うテーマは、筆者の課外活動から拾い上げられたものである。

こうした交流を続ける中、筆者は神戸ユニオン教会のドイツ語礼拝参加者たちと知り合い、教会文書の整理を依頼された<sup>1</sup>。その過程で、同教会のドイツ語礼拝を始めた牧師が、普及福音新教伝道会 *Allgemeiner Evangelisch-Protestantischer Missionsverein* (AEPMV) という組織から派遣されていたことを知る。しかも初代の担当者は、30年以上も京都に住んだドイツ人宣教師だという。彼らは、如何なる背景と意図をもって極東へ渡ってきたのだろうか。また、その伝道が日本、とりわけ神戸を含む関西地方の近現代史に残した足跡とは何なのか。そして、その過程で宣教師たちはどのような認識を形成し、そこにどのような思想が表出しているのか。本稿は、当該伝道会の関西地方における活動概要を先行研究と伝道報告書から再構成しつつ、ある古参宣教師の対日認識を紹介する。

日本におけるプロテスタント宣教史研究と言えば、全国を扱う場合も、都市神戸を扱う場合も、英米系教会の宣教活動に対する関心が支配的だった<sup>2</sup>。無論その背景には、英米系教会による宣教と日本人牧師養成が相対的に成功したという事情がある。そのため、日本プロテスタント宣教史という視点を採用すると、どうしてもドイツ系プロテスタント教会の意義は薄まって見える。対して、日本におけるドイツ宣教史研究という視野で見れば、自由主

---

<sup>1</sup> 当該教会の大まかな歴史については以下の動画を参照。Evangelische Kirchengemeinde Kobe-Osaka「ドイツ語プロテスタント教会神戸大阪 創立 150 周年」、YouTube, [https://www.youtube.com/watch?v=konVMQA\\_RA](https://www.youtube.com/watch?v=konVMQA_RA), 2023 年 3 月 10 日閲覧確認。この史料整理作業は、近隣のドイツ史・ハプスブルク史研究者を巻き込む形で、一つの研究計画へと昇華されている。「神戸ユニオン教会での資料整理・調査活動」、Promis 神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート、[http://promis.cla.kobe-u.ac.jp/collabtract\\_research/kinugasa\\_2022/](http://promis.cla.kobe-u.ac.jp/collabtract_research/kinugasa_2022/), 2022 年 3 月 10 日閲覧確認。

<sup>2</sup> 中村敏『日本キリスト教宣教史——ザビエル以前から今日まで——』いのちのことば社、2009 年；キリスト教史学会編『宣教師と日本人——明治キリスト教史における受容と変容——』教文館、2012 年；神田健次「第一章 総論——ミナト神戸の宗教とコミュニティー——」神田健次編『ミナト神戸の宗教とコミュニティー』関西学院大学キリスト教と文化研究センター、2013 年；同「第四章第一節 総論——神戸の宗教とコミュニティー——」新修神戸市史編纂委員会編『新修 神戸市史 生活文化編』神戸市、2020 年、706-744 頁。

義神学の輸入に寄与した普及福音新教伝道会の日本宣教に対する注目が著しい。この活動に対する包括的回顧としては、まず神学者の堀光男らによるものが挙げられる<sup>3</sup>。同研究には、キリスト者の責任論的な観点から伝道会の過去に反省を迫るという意図が強く反映されているが、その際に実施された広範な史料整理もあって、のちの研究にとって不可欠な叩き台が提供されたことは間違いない。この研究を基礎に新たな地平を開こうとしたのが、「日本におけるドイツ宣教史研究会」の論文集である<sup>4</sup>。同じく神学者たちによって組み込まれたこの研究は、個別知識人に対する影響や人類学発展への寄与を指摘し、また普及福音新教伝道会以外の組織による社会奉仕活動にも言及している。

ここで主な題材とされてきた普及福音新教伝道会は、日本だけではなく中国を含む東アジア帯と関係を持ちつつ、在日ドイツ・スイス人に配慮しながら、ドイツ語による文化・教育活動の拠点ともなっていた。近年の日独関係史研究において、中国をも視野に入れた東アジア国際関係が念頭に置かれること<sup>5</sup>、日本のドイツ系住民たちの中に戦争勃発や体制転換を象徴する小宇宙が見出されること<sup>6</sup>、世俗の政治権力を背景とした文化交渉に注目されること<sup>7</sup>を考えれば、この伝道会や関連教会に対する検討が日独関係史研究に寄与するのではないだろうか。

伝道会が成立するまでに、19世紀のドイツ語圏におけるプロテスタント諸教会の間では、プロイセン王によるルター・カルヴァン両派合同政策が推進されていた。これに対して、地方ではルター派諸教会による抵抗も見られ、不満分子が国外へ移住したりするなど、宗派的情熱が再燃した。また、合理的世俗化に対する信仰覚醒運動も生じることで、17~18世紀に淵源を持つ反知性主義的な敬虔主義が復興され、市民たちの参加による結社活動として新たな形で展開した。果たして、敬虔主義者や宗派主義者は積極的に宣教活動を組織化していく<sup>8</sup>。これらに対して、同時期の神学界では、歴史批判的・聖書文献学的な宗教史学派や自

<sup>3</sup> 堀光男ほか編『論文集 ドイツの日本伝道と日本のプロテスタンティズム』私家本、1999年。

<sup>4</sup> 日本におけるドイツ宣教史研究会編『日本におけるドイツ——ドイツ宣教史百二十五年——』新教出版社、2010年。

<sup>5</sup> 工藤章・田嶋信雄編『日独関係史 一八九〇—一九四五』全三巻、東京大学出版会、2008年；熊野直樹・田嶋信雄・工藤章編『ドイツ=東アジア関係史 一八九〇—一九四五——財・人間・情報——』九州大学出版会、2021年。

<sup>6</sup> 大津留厚『青野原俘虜収容所の世界——第一次世界大戦とオーストリア捕虜兵——』山川出版社、2007年；同『さまよえるハプスブルク——捕虜たちが見た帝国の崩壊——』岩波書店、2021年；中村綾乃「第二章 東アジア在留ドイツ人社会とナチズム」工藤章・田嶋信雄編『日独関係史 一八九〇—一九四五 III 体制変動の社会的衝撃』東京大学出版会、55-97頁；同上『東京のハーケンクロイツ——東アジアに生きたドイツ人の軌跡——』白水社、2010年。

<sup>7</sup> 清水雅大『文化の枢軸——戦前日本の文化外交とナチ・ドイツ——』九州大学出版会、2018年；山本晶子「戦時下の日独学徒交流と「日本精神」——精神的提携論と原理的日本主義のあいだ——」『ゲシヒテ』第12号、2019年、1-15頁。

<sup>8</sup> 水谷誠「第三章 ヨーロッパ大陸のキリスト教」栗林輝夫・西原廉太・水谷誠編『総説 キリスト教史3 近・現代編』日本キリスト教団出版局、2007年、153-227頁。

由主義神学が台頭しつつあった。概して、彼らは聖書を人類の生み出した宗教的な遺産と位置付け、キリスト教から魔術的な要素を極力排除する。教義すら先天的ではなく、各時代状況に応じて生成された歴史的産物だと喝破されることもあった。その代表的な論客としては、フリードリヒ・シュライアーマッハー Friedrich Schleiermacher (1768-1834)、アルブレヒト・リッチェル Albrecht Ritschl (1822-1889)、アドルフ・フォン・ハルナック Adolf von Harnack (1851-1930)、エルンスト・トレルチュ Ernst Troeltsch (1865-1923) などが挙げられる<sup>9</sup>。文教政策を通じて世俗権力と接近する傾向も持った彼らは、一方で敬虔主義者・宗派主義者たちと対抗しつつ、他方でドイツ帝国の拡張政策と結び付く。普及福音新教伝道会がその歩みを始めたのは、まさにドイツ帝国が世界進出を本格化させる直前期のことである。

APEMV の黎明期や関東での活動については、先述の論文集『日本におけるドイツ』やフェルディナント・ハーン編の創設百周年記念著作<sup>10</sup>が詳しいので割愛する。いずれにしても、APEMV の初代日本宣教師として到来したのは、スイス人の「スピネル」ことヴィルフリート・シュピナー Wilfried Spinner (1854-1918) だった<sup>11</sup>。1885 年から東京へ定着した彼は、築地のアメリカ系東京ユニオン教会の施設を借り、ヴァイマル公国教会のルター派牧師としてドイツ語礼拝を守った。彼の下で三並良 (1865-1940)、向軍治 (1865-1943)、丸山通一 (1869-1938)、赤司繁太郎 (1873-1965) などの神学者が養成される。彼ら日本人牧師たちによる教会は、「普及福音教会」として活動を始めた。20 世紀へ入るまでの段階で、APEMV は人材や資金に不安を残しつつも活動範囲を拡大し、神学的には爪痕を残したと言える。

関西地方での伝道は、20 世紀と幕開けを共にした。その初代担当者が「シルレル」ことエミール・シラー Emil Schiller (1865-1945) というドイツ人である。シラーは 1865 年 10 月 16 日、プロイセン領シュレースヴィヒのフーズム Husum で誕生した。ただし、彼はその少年期のほとんどを、ドイツ南西部コブレンツの行政区域アールヴァイラー Ahrweiler で過ごしている。ボンのギムナジウムを卒業後、5 学期 (2 年半) をボン大学、2 学期 (1 年) をベルリン大学で過ごした彼は、最終的に神学と哲学を修める。1890 年 5 月、彼はボン北東近郊のジークブルク Siegburg で助任説教師 Hilfprediger に着任すると、翌 91 年秋、ラインラント北部テックレンブルクでラテン語学校講師と第二説教師になり、やがて主任説教師

<sup>9</sup> このうちハルナックについては、筆者が以下の記事で簡潔に紹介している。拙稿「《読書案内》信仰と科学との間で思索すること——クルト・ノヴァク (加納和寛訳)『評伝 アドルフ・フォン・ハルナック』——」大阪日独協会編『Der Bote von Osaka. Berichte der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Osaka e.V.』2022 年 10 月 18 日、<https://bote-osaka.com/yomoyama/2022/10/1128/>、2023 年 3 月 9 日閲覧確認。またトレルチュについても、筆者は以下の口頭報告で比較対象に挙げた。林祐一郎「信仰者としての歴史家——佐藤真一氏の近刊『ランケと近代歴史学の成立』を受けて——」、世界史研究会 2022 年度総会 (歴史論研究会との共催)、於東京電機大学鳩山キャンパス、2023 年 2 月 18 日、<https://worldhistoryresearch.jimdofree.com/>、2023 年 3 月 9 日閲覧確認。

<sup>10</sup> Ferdinand Hahn (hrsg.), *Spuren... Festschrift zum hundertjährigen Bestehen der Ostasien-Mission*, Stuttgart 1984.

<sup>11</sup> シュピナーは日本滞在の記録を残している。シュピナー (H. E. ハーマー編、岩波哲男・岡本不二夫共訳)『明治キリスト教の一断面——宣教師シュピナーの『滞日日記』——』教文館、1998 年。

に昇進した<sup>12</sup>。

彼が当初から海外伝道への従事を想定していたのかは定かでない。1894 年秋に彼が AEPMV の宣教師として東京へ派遣されることが決まった時、その心境はどうだったろうか。確かなのは、1894~95 年の冬、日本伝道へ備えるためにベルリン、ポツダム、イルメナウ、ロンドンで初代日本宣教師シュピンナーの指導を受け、日本の言語や慣習へ事前に触れたことである。そうして迎えた春、彼はスイスとイタリアを經由し、海路で横浜へ上陸した。同年 4 月 27 日、宣教師マックス・クリストリープ Max Christlieb (1862-1914)、同じく宣教師カール・ムンツィンガー Carl Munzinger (1864-1937) とその妻が、東京のムンツィンガー宅で歓迎会を開く。時あたかも、日清戦争の講和条約として下関条約が締結された頃である。このように、シラーが日本駐在を始めた時期は、日本が列強の一角として台頭する画期と奇妙にも一致する。以後、シラーは日本での生活に馴染んでいく。1897 年 4 月にドイツ人のリーナ・ズーレ Lina Suhre を東京に呼び寄せて結婚した彼は、早くも翌 98 年には日曜学校の児童を日本語で指導していた。1900 年 6 月 25 日には東京のシラー宅で最初の子供、長女マルグレート Margret が誕生し、同年から日本人に対する授業や説教でシラーが日本語を使用することが通例となった<sup>13</sup>。

この 1900 年までに、AEPMV の日本における第二拠点が京都に決定される。その理由としては、日本仏教の一大中心地へ敢えて踏み込むという意図もあったようだが、京都帝国大学関係者によるドイツ学への興味や、同志社英学校などを中心とするキリスト教の需要が見込まれていた<sup>14</sup>。この「西教区 Westbezirk」の宣教師として京都へ赴任したのがシラーである。1904~1909 年には、大津・膳所・大阪・敦賀・豊橋へ伝道対象を拡大している<sup>15</sup>。1904~1913 年には京都帝国大学でドイツ語とドイツ文学の講師として勤務し、1907~1910 年、京都帝国大学文学部で哲学を教授する。また、小さな冊子という形ではあるが、日本語による出版活動も行われた<sup>16</sup>。彼が 1908 年に日本全体の宣教監督に任命されてからの足跡については、東京の富坂キリスト教センターに日本宣教監督とベルリン本部との往復書簡(段ボール 2 箱分)が所蔵されているため、ある程度の裏付けが可能である。

これまではアメリカ人牧師による英語礼拝が通例だった神戸ユニオン教会に、定例のドイツ語礼拝が加わるのも、シラーが京都に常駐してからのことである。20 世紀初頭、神戸市内のドイツ人は約 200 人(うち 25 人ほどが子供)を数えた<sup>17</sup>。1910 年頃には平均で毎回 40 人ほどが参加していたが、毎年末のクリスマス祭には日独英語の各話者が参加し、それ

---

<sup>12</sup> Emil Kondt, *D. Schillers Lebenswerk in Japan*, Berlin 1921, S. 6.

<sup>13</sup> *Ebd.*, S. 6-17.

<sup>14</sup> *Ebd.*, S. 18.

<sup>15</sup> *Ebd.*, S. 26-32.

<sup>16</sup> エミール・シルレル『神の觀念と近世哲學』真理社、1901 年；エミール・シルレル／青木律彦『馬太傳衍義』真理社、1908 年。

<sup>17</sup> Jürgen Lehmann, *100 Jahre Deutsche Schule Kobe 1909 bis 2009*, München 2009, S. 14.

ほど強い信仰がなくとも、教会は同郷人たちの社交場として機能する<sup>18</sup>。1909年秋に神戸ドイツ人学校が創立されると、2人のドイツ人教師に並んでシラーが宗教の授業を担当した。ただし、当初はカトリックも兼ねており、彼の教授内容が福音主義限定になったのは1929年のことである。長らく運営に関与した彼は、学校史上で功労者に数えられている<sup>19</sup>。

ただし、1910年5月21日には京都で三女のリーゼロッテ Liselotte が誕生するという恩恵に与るも<sup>20</sup>、翌11年7月にベルリンへ宛てられた書簡には、関西での活動拡大によりシラー個人の負担が増大したため、人員補充が望まれるとの旨が記載されている<sup>21</sup>。事実、同年までに傘下の日本人牧師たちが現愛知県南端の田原にも進出したので、京都を本拠とする宣教活動の前線が伸びきっていた。また1913~1914年には、京都の会堂を新設する資金集めに奔走し、日本を離れてドイツ・スイス・イタリアで何度も講演を行った<sup>22</sup>。

彼らにとって最大の危機は、独日戦争としての第一次世界大戦だった。1914年に日本が対独参戦を決定すると、ドイツ系教会やドイツ人学校は困難な状況に追い込まれた。それでも、日本人たちと信頼関係を築いてきたと自負するシラーは楽観的だったようで、教会の宗教活動が日本官憲によって積極的な妨害を受けることはない、開戦初期の報告書には記している<sup>23</sup>。大戦中、彼は全国各地のドイツ人俘虜収容所を慰問し<sup>24</sup>、1917年秋の宗教改革七百周年記念もスイス人、アメリカ人、日本人たちと共に祝った<sup>25</sup>。1918年晩秋に祖国で革命が起こり、ドイツの敗北が決定した後も、確かに祖国の行方を憂いはしたが、日本伝道自体は順調であると報告している。その理由として、困難な時期にも拘わらず集會が維持され、献金も増加傾向にあることが挙げられた<sup>26</sup>。

とはいえ、損害は小さくなかった。第一次世界大戦後の財政的困難は、1919年に大津・膳所・敦賀の拠点で財政難のため閉鎖されるという形で表出している<sup>27</sup>。体制転換と領土割譲に伴ってAEPMV自体も改組された。具体的には、1922年にAEPMVがドイツ東亜伝道会 Deutsche Ostasienmission (DOAM) と名称を変えただけでなく、これまでのドイツ部会とスイス部会にエルザス部会が追加され、イタリア・オーストリア・トランシルヴァニア・チェコスロヴァキアという、ドイツ系住民の存在する地域にそれぞれ後援会が設置されたのである。神学界では、第一次世界大戦への反省から、相対主義的で既存政治体制にも妥協しがちな自由主義神学への批判が強まった。こうして台頭するのが、神の絶対的超越性を確信

<sup>18</sup> Knodt, *a.a.O.*, S. 35.

<sup>19</sup> Lehmann, *a.a.O.*, S. 23, 28, 34-35, 38, 48, 47, 49.

<sup>20</sup> Knodt, *a.a.O.*, S. 36.

<sup>21</sup> Tomisaka Christian Center Rep. D195-37(18)469.

<sup>22</sup> Knodt, *a.a.O.*, S. 38.

<sup>23</sup> Tomisaka Christian Center Rep. D195-37(25)655.

<sup>24</sup> Knodt, *a.a.O.*, S. 47.

<sup>25</sup> *Ebd.*, S. 41.

<sup>26</sup> *Ebd.*, S. 44.

<sup>27</sup> *Ebd.*, S. 31-32.

し、近代社会にも批判的な弁証法神学である。カール・バルト Karl Barth (1886-1968) などを代表とするその思潮は、伝道会の内部にも及ぶ。

1920年代には、日本国内でも変動があった。1923年に関東大震災が起こると、関東地方から神戸に多くのドイツ人たちが流入し、子供たちの数も増加傾向へ転じたため、消滅寸前だった神戸ドイツ人学校が息を吹き返した。1923-1931年にはシラーが京都帝国大学で再びドイツ語講師を務め、キリスト者の医学教授・藤波鑑 (1871-1934) を通じて聖書学者の山谷省吾 (1889-1982) と交流を深める。山谷はシラーの下でギリシア語聖書の講読やヨハネ伝の註解に取り組み、ハルナックの主著『キリスト教の本質 *Das Wesen des Christentums*』を和訳するという業績を残した<sup>28</sup>。1929年、神戸ユニオン教会の会堂も神戸市中心部の生田町へ移転する。阪神淡路大震災後に会堂は再移転したが、建物自体は「フロインドリーブ FREUNDLIEB」というドイツ系喫茶の本店として現存する<sup>29</sup>。同年には京都大学の近くで遂に念願の新会堂が建立されたが、これは現在の日本基督教団錦林教会である<sup>30</sup>。

また、かつてシラーに学び、千葉から大阪へ移っていた青木律彦牧師が、朝鮮人に対する伝道へ着手する。1925年頃に10万人へ上っていた内地在住朝鮮人の数は、1934年までに53万7千人ほどまで増加することになるが、大阪伝道を担当していた青木牧師は、1929年にスラムを訪れて朝鮮人牧師たちとの対話も進めた。1932年には普及福音教会の影響下、朝鮮半島で洗礼を受けた牧師たちによって大阪・芦屋・小林で三つの朝鮮系教会が成立し、1934年には和歌山と堺でも二つの朝鮮系教会が成立する。ここで礼拝を担当した二人の朝鮮人牧師は、日本人牧師と対等な立場で普及福音教会の年次大会に参加し、1935年には伊丹で自ら朝鮮人伝道を開始した。ただし、朝鮮人信徒たちは、戦時体制下で1940年に普及福音協会が日本基督教団へ統合される前に、在日大韓基督教教会へ編入されることになる<sup>31</sup>。

シラーに限らず、日本へ派遣された宣教師たちには、日本事情を欧米へ紹介する役割も期待されていた。とりわけ AEPMV/DOAM には、ドイツ語圏人類学の影響が見られる。そもそも文化人類学的な視点は彼らの自由主義神学と相性が良く、効果的なキリスト教文化伝達という目的からも比較宗教学的な研究は推奨された<sup>32</sup>。その意味で、伝道活動はこうした

<sup>28</sup> アドルフ・フォン・ハルナック (山谷省吾訳) 『キリスト教の本質』玉川大学出版部、1977年 (初版: 『基督教の本質』イデア書院、1925年)。

<sup>29</sup> “HISTORY”, 「フロインドリーブ」公式サイト、<http://h-freundlieb.com/wp1/history/>, 2023年3月9日閲覧確認。

<sup>30</sup> 「日本基督教団 錦林教会」、<https://kinrin.kyoukai.jp/>, 2023年3月17日閲覧確認。ただし、同サイトの説明文には「第一次世界大戦で世界情勢が悪化する中、当時の宣教師シラーは願いをもって、母国スイスへと献金旅行をしました」とあるが、彼が献金旅行へ赴いたのは大戦中ではなく大戦前のことであり、彼の出身国もスイスではなくドイツである。

<sup>31</sup> Heyo E. Hamer, „Die Missionarbeit in Japan 1885-1946“, in: Hamer (hrsg.), *Spuren... Hundert Jahre Ostasien-Mission*, S. 90-91.

<sup>32</sup> この点については、『日本におけるドイツ』所収の川島堅二による論稿「普及福音新教伝道会とドイツ語圏人類学」を参照。

研究に不可欠な現地調査を兼ねていたとも言える。シラー自身もその例に漏れず、1895年からドイツ東洋文化研究協会 Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (OAG)へ加入していた<sup>33</sup>。

そこでシラーが注目したのは、日本における神道の根強さである。彼は1911年、『神道——日本の民族宗教—— *Shinto: die Volksreligion Japans*』という著作を発表した。当時の日本では、神道が「宗教」なのか否かについて論争があり、国家神道は自らを「宗教」でないと主張することで、表向きには国内諸宗教の平等や自由を侵害しないという立場を示しながら、事実上は政府から優遇される傾向にあった<sup>34</sup>。それに対してシラーは、神道を国家祭祀ではなく、民衆に根付いた一種の「宗教 Religion」と捉える。更に、彼は日本人たちを立派な「文化民族 Kulturvolk」だと評しながら、彼らが神道という原始的な土着信仰に固執していることを批判する。また、天皇制の正統性と神道の政治利用に対する痛烈な批判も見られる。無論これらは、日本伝道への支援を得ようと、改宗の重要性を強調するための説明でもある。とはいえ、日露戦争と韓国併合がまだ記憶に新しい時期に、東アジアをキリスト教化するため、その盟主とされる日本のキリスト教化こそが肝要なのだと訴える序言には、使命感に燃える宣教師の情熱が込められている<sup>35</sup>。

しかし、伝道引退後の1935年に発表された第二版では、彼の熱意が相対的に後退している。むしろここでは、自然宗教である神道の国家祭祀化に対する警戒心が目立つ。その一方で、大幅に加筆された「神道教の未来」と題する終盤の章で彼は、「固有」を世界へ押し付けかねない日本を叱責する<sup>36</sup>。同年に出版した『今日の日本』でも、日本人信徒たちが悪し

<sup>33</sup> OAGの公式サイトでは、彼が歴代会員の一人として紹介されている。“Emil Schiller”, Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, <https://oag.jp/people/emil-schiller/>, 2023年4月27日閲覧確認。

<sup>34</sup> このような当時の事情については、以下の著作が詳しい。安丸良夫『神々の明治維新——神仏分離と廃仏毀釈——』岩波新書、1979年；羽賀祥二『明治維新と宗教』法蔵館文庫、2022年（初版：筑摩書房、1994年）；山口輝臣『明治国家と宗教』東京大学出版会、1999年。

<sup>35</sup> 「だが中でも、本書の執筆は、日本民族の宗教的な進歩が心から気懸かりである人々を思っていることである。そういった人々には、別の部分では極めて高度に発達した民族に対して、キリスト教伝道がどれほど重要な奉仕をなさなければならないのか、これによって再び明らかになるだろう。そして、そうした人々は、確信をもって次のことを強く感じるであろう。それは、日本はまだ当分は伝道対象国 Missionsland であるだろうし、確かに、日本がとうに遅い手で世界史 Weltgeschichte へ介入するのを始めてしまったわけだから、なおいっそう重要な意義を有する伝道対象地域 Missionsfeld になってしまっただろう、ということだ。日本という手本を、東アジアの何百万もの人々が見ているのだ！もし日本が早いうちにキリスト教へ改宗したならば、東アジアでキリスト教が決戦 Entscheidungsschlacht に勝利するであろう。本書からも我らがドイツの日本伝道を強化する刺戟が広くもたらされることが、著者の願いであり、望みである。というのも、日本の宗教的な未来を定める諸々の要因の中で、ドイツ・プロテスタント的な精神 der deutsch-protestantische Geist も、その敬虔さ Frömmigkeit と寛大さ Weitherzigkeit によって、有効に支持されるだろうからだ」。Emil Schiller, *Shinto: die Volksreligion Japans*, Berlin 1911, S. 8.

<sup>36</sup> 「ところがまた、この木の根にも既に斧が入っている。現代 Die Neuzeit は、神道崇拝 Shintokult の無邪気な実践を損なわざるを得ないものを、あまりにも多くもたらしている。ここでは差し当たり、日本の近代的な世界地位 die moderne Weltstellung Japans に言及しよう。神道という旗印の下、日本は世界地位に

き成長の過程を辿らないよう、西洋人宣教師が日本に長く留まって監視し続けなければならないという旨の主張を行っている<sup>37</sup>。

第二版の序言でシラーは、ドイツ国内でヒトラー政権が成立したという経緯もあり、国民社会主義への歩み寄りを見せる<sup>38</sup>。こうした態度は後任者のエゴン・ヘッセル Egon Hessel (1904-1974) を巡る曖昧な対応にも関連しているようだ。ヘッセルはミュンスターとボンでバルトに学んだ、新世代の弁証法神学者である。彼は 1931 年春からベルリンで 4 ヶ月間の日英語研修を済ませると<sup>39</sup>、満洲事変が勃発した頃に青島を経て日本へ到達した<sup>40</sup>。この明らかに思想の異なる青年を、シラーは当初歓迎していた。というのも、日本での宣教活動は人員の拡充を長年にわたって求めてきたし、自身も持病のリウマチが悪化したために引退を望んでいたからである<sup>41</sup>。

シラーは引き継ぎを終えた後、翌年春までに故郷へ戻ったが、2 年後にヒトラー内閣が成立すると、同年夏にヘッセルの師匠バルトが政権批判へ踏み込む。これに対し、普及福音教会の日本人牧師たちの間では、三並良がバルトを批判するなど、ヒトラー擁護の動きが見られるようになった。そんな中で 1934 年、ヘッセルは京都伝道の機関誌『生命の泉 *Lebensquell*』

---

到達し、ゆえにその民族 *das Volk* は神々に感謝している。しかし、世界の日本 *ein Weltjapan* (*sekai no Nihon*) はずっと、一つの国民宗教 *Nationalreligion* の狭い見地に立ち続けられるのだろうか。地図を見れば、世界に目が開かれ、[筆者補足：天照大神という] 太陽の女神が治める地域が、確かに「天下 *tenka*」と呼ばれているものの、それが地表のごく限られた部分に過ぎないと認識されよう。日本が世界史 *Weltgeschichte* の中で一定の役割を果たそうとすれば益々、現代では国民で区切られた宗教 *eine national begrenzte Religion* が話にならないものであることが、世界的にも説明され認識されるようになる。学問が世界規模の諸真理 *weltweite Wahrheiten* を告知するのと同様、真の道徳 *die wahre Moral* が世界と人類の道徳 *eine Welt- und Menschenmoral* であるのと同様、宗教的な諸真理 *die religiösen Wahrheiten* も世界規模であらねばならず、地上の僅かな地域だけで有効たりうるようなものであってはならないのだ。Emil Schiller, *Shinto: die Volksreligion Japans. Zweite verbesserte und vermehrte Auflage mit 17 Bildern nach Photographien*, Berlin 1935.

<sup>37</sup> 「宣教師がいなければ、日本のキリスト教は更なる発展の中で、儒教の余波により極めて倫理的なキリスト教になるという危険を冒すことになる。核心に留まるのが恩寵と信仰でなければ、確固たる宗教的な基礎付けは損なわれよう。仏教的な過去があれば、キリスト教が一神教から多神教と宗教的混合へと至る危険は、あまりにも大きいだろう。また、そこに欠けているのは、西洋のキリスト教的敬虔、宣教師の家々におけるキリスト教的家庭生活、妻への貴き敬意、女性の尊厳に対する積極的承認だろう。これらは全て、今日の日本人たちがまだ学ぶ必要のあるものだ。しかし、宣教師たち自身には、彼らと並んで働いている日本人牧師たちに関して、こう語るのを学ぶことが奨められよう。「彼は成長しなければならないが、私は取り去らなければならない *Er muss wachsen, ich aber muss abnehmen*」」。Emil Schiller, *Das Japan von heute*, Berlin 1935, S. 30.

<sup>38</sup> 「結びに、次のことも指摘しておきたい。今や我々の時代にあつては、フェルキッシュなもの *Völkischen*、土着のもの *Bodenständigen*、種族固有なもの *Arteigenen*、また宗教の現象形態 *Erscheinungsform* にとつてのその意義をより大きく強調すれば、例えば神道教なら日本人の民族と国家にとつての意義を多くの側面から強調すれば、それはただ興味深いのみならず、教訓に富み、多くの点で戒めとなりうるだろう」。Schiller, *Shinto. Zweite Auflage*, S. 10.

<sup>39</sup> Tomisaka Christian Center Rep. D195-37(53)1099, 1102, 1103.

<sup>40</sup> Tomisaka Christian Center Rep. D195-37(53)1107, 1108, 1109, 1111.

<sup>41</sup> Tomisaka Christian Center Rep. D195-37(53)1097.

に政権批判論文を発表する。だがベルリンの本部は、ヒトラーが共産主義の脅威からドイツを救ったと評価し、ヘッセルには否定的な反応を示した<sup>42</sup>。政治的態度を巡って東京と京都は対立し、東西で日本伝道の主導権争いも生じる<sup>43</sup>。結局、1936年にヘッセルは東亜伝道会から罷免された<sup>44</sup>。ここで、京都に DOAM の宣教師が常駐する時代は中断する。しかし、この「ヘッセル事件 Fall Hessel」を巡るシラーの見解は判然としない。彼の名は助言者として報告書の中に登場するものの、具体的にどう意思決定に関与したのは定かでないからだ。

シラーの最晩年に関する情報は詳らかでないが、彼が温泉保養地のバート・ゴードスベルクで亡くなったのは1945年8月のことである。したがって、彼はドイツ帝国の成立から第三帝国の崩壊までを、また明治維新の始まりから大日本帝国の終わりまでを生きることになる。日独の近現代史を見つめるためにも、こうした彼の視線に注目することは決して無益ではないだろう。

(京都大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員 DC)

---

<sup>42</sup> Tomisaka Christian Center Rep. D195-37(59)1305.

<sup>43</sup> Tomisaka Christian Center Rep. D195-37(59)1307.

<sup>44</sup> ヘッセルを巡る係争については、『日本におけるドイツ』所収の村上伸による論稿「第三帝国時代の東亜伝道会と日本の教会——エゴン・ヘッセルの場合——」が詳しい。ただし、ヘッセルはその後もしばらく日本に残り、旧制高校でドイツ語講師として雇用された。また彼は、ドイツの国民社会主義政権による同質化政策を批判したとは言っても、日本政府によるキリスト諸教会の統合は話題とせず、1938年頃には満洲に赴いて日系キリスト教会を訪問するなど、日本の政策には妥協的だったのではないとも言われている。Hamer, a.a.O., S. 95.